

らっかせい新品種「サヤカ」

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	鈴木, 一男
巻/号	47巻1号
掲載ページ	p. 39-39
発行年月	1992年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



研究通報

らっかせい新品種「サヤカ」

鈴木 一 男

登録番号：らっかせい農林10号 系統名：関東64号 交配組合せ：関東36号(アズマユタカ)/関東34号

特性の概要

草型はやや立性に近い中間型で、分枝長は短い。分枝数はナカテユタカより多く、千葉半立並である。葉色はナカテユタカと同じ暗緑色である。

莢の大きさは中程度、くびれや網目はナカテユタカより浅い。莢殻の厚さはナカテユタカよりやや厚い。粒重は大の小でナカテユタカよりやや小さい。種皮色はナカテユタカ、千葉半立と同じ淡橙褐である。

開花期はナカテユタカと同時期、落葉はナカテユタカよりやや遅く、千葉半立より早い。熟期(品質からみた収穫適期)は開花期後約85日でナカテユタカより5日遅く、中生の晩に分類される。

倒伏には強いが、各種病害に対する抵抗性はナカテユタカ、千葉半立と同程度である。

収量性は千葉半立より高く、ナカテユタカと同程度であるが、多肥栽培ではナカテユタカよりやや収量が低い。莢や子実の品質は良好で千葉半立よりまさり、ナカテユタカと同等である。

煎莢での食味は良好で、ナカテユタカと同等ないしややまさる。また、煎莢加工時の莢割れが少なく、煎莢加工用に適している。

栽培上の注意

- ①成熟期がナカテユタカよりやや遅いが、掘り遅れると品質や食味が低下するので、適期収穫を励行

サヤカの特性

項目	サヤカ	ナカテユタカ	千葉半立
開花期(月.日)	7.1	7.1	7.3
成熟期(月.日)	9.25	9.19	10.6
莢実重(kg/a)	35.5	37.9	30.7
子実重(kg/a)	25.4	27.3	21.6
同対比(%)	93	100	79
百粒重(g)	86.7	91.1	86.0
品質	上	上	やや上

育成地での成績(昭和60～平成2年, 5/15播種, マルチ栽培)

Kazuo SUZUKI: A New Peanut Variety "Sayaka". 農業技術47(1), 1992.

する。

- ②多肥栽培や野菜跡地の肥沃すぎる畑での栽培は避ける。

- ③各病害に対しては特に強くないため、適期防除を図る。

準奨励品種採用県：茨城県

命名の由来：莢の品質や風味がよいこと、莢が地中に行えることから、「大地の香り」の意味をかけて。

育成後記

我が国の落花生は、その栽培特性から畑作地帯での輪作作物として位置付けられ、これまでに野菜作との輪作体系上有利で、しかも野菜跡地の肥沃な畑で特性が発揮できる中生品種のアズマユタカ、ナカテユタカなどの品種が育成された。

サヤカは1973年、関東36号(後のアズマユタカ)と関東34号との交配によるもので、アズマユタカ並の熟期と多収性に、品質向上を付与することをねらいにしたものであった。

茨城県は千葉県に次ぐ落花生の産地で、ナカテユタカが作付の60%を占めているが、収穫時期が水稻(コシヒカリ)と競合するため、掘り遅れによる品質上の問題が一部に見られる。

また、莢殻が薄いため煎莢加工中に莢が割れやすいとの指摘もある。

サヤカはナカテユタカより成熟期が5日ほど遅いため、水稻との収穫時期の競合を避けることができる。また、多収で莢の品質や食味も良く、莢殻が固いため莢割れも少なく、煎莢加工用として適している。茨城県は、近年落花生の作付面積が年々減少しているが、新品種サヤカの奨励普及によって、茨城県産落花生の品質向上と生産安定が図られ、今後の落花生の生産振興に役立ってもらいたいと願っている。

育成従事者：鈴木一男、中西建夫、高橋芳雄、竹内重之、松田隆志、鈴木茂、神代三男、石井良助、屋敷隆士、岩田義治、石田康幸、曾良久男、長沢上、亀倉寿

(千葉県農業試験場落花生育種指定試験地主任)